OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

久米榮左衞門の「經濟元錄」を中心として、

——其の述作年代に就いての新說——

兒玉洋一

はしがき

高松藩は文政末から天保にかけて非常なる經濟的難局に直面する。かゝる財政・經濟的困窮の事例は他の諸藩にも幾多散見するところであつて決して珍しい問題ではない。ではあるが、天保中期から明治初期にかけて、完全に其の難局を封鎖克服して、縡々の餘裕を殘しつゝ、明治政府へ百万圓の獻金を爲せる史實は、興業意見の所說[1]をまつまでもなく筆者にとつては重大なる學的關心事である。それが如何なる歷史的事由よりして、また如何なる施策よりして、何故かゝる成果を收めしかを究明する事自體が筆者に課せられた良心的命題の一つであり、且微力國家へ奉公いたすの道でもあると思ふ。

結論を豫め端的に展示すれば、高松藩が文政末の經濟的危機より巧みに脫して縡々の餘裕を殘すに至れる主たる事由は、砂糖・鹽及び綿の所謂讃岐三白の生產經濟と其の金融に深く結びつける點に歸する。而して其の砂糖の生產と金融に就いては既に社會經濟史學會總會第十二回の大會に於て報告し、大方の御叱正と垂教を仰いだ所であつた[2]。據つて今回は鹽の問題を核心とするが、茲に展開する久米榮左衞門の「經濟元錄」も亦鹽に關しての實際的・技術的記錄である。其の全文は、何等かの機會に印刷に付し得る事を庶幾するが、こゝには其の批評的紹介を試みる事としよう。

一、科學者としての久米榮左衞門

一言にして久米榮左衞門を評すれば、極めて理數土木に長けた科學者であるといふに盡きる。坂出墾田碑によると『頗通二天象地理長二於思慮一而尤喜二便レ世利レ衆之事一[3]』とあるが、土木經世家としての豫定利益の算出も其の企圖と成果に於て餘り狂つてゐない。之は實際家として極めて大切な事である。科學者としての靜的研究の成果が實際的な動的部面に具象化されて役立つとき其處に始めて大なる厚

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

生利用の經濟が生れる。榮左衞門は殆んど獨創、文政九年三月豫てより高松藩に企畫進言せる坂出鹽田の築造に取りかゝり刻苦精勵三ケ年餘幾万の土工を指揮督勵して、文政十二年八月遂に其の偉業を完遂し、坂出市をして今日の殷盛さに赴かしむる基礎を築いたのである。

榮左衞門は安永九年讃岐國大川郡相生村に生れ天保十二年五月六十二歳を以て鄕里に沒してゐるが、家は代々舵師であり、農業を兼ねてゐた。幼少の頃より頗る器用で時計其他の器物を修理せる逸話が殘つてゐる。今鎌田圖書館に保存せられる彼の自筆草稿「城出江尻　御新開中算用並入目銀積」などを見ても一見和算に堪能な役の面目が躍如として窺はれる。七・八才の頃より家人に連れられて屢〻海路馬宿・大坂間を往復してゐるが、十九歳にして大坂の天文學者間五郎兵衞の門下生となつてゐる。間重富は藏田流の天文・數理に長じ、特に測量器械の製作については當代一流であつた。榮左衞門は當時科學文藝の中心地大坂に於て富裕なる間氏の膝下に在り、四ケ年よく西洋曆學の蘊奥を究めたが父死亡の爲一旦享和二年に歸國してゐる。其後觀測技術も精妙の域に達せる頃、あたかもよし文化三年高松藩は彼に藩内測量を命じた。こゝに於て彼は勇躍星眼鏡・地平儀・象眼儀・渾天儀・紀元儀等の測量器を整備し、渡邊專助以下拾餘人の助手を從へ其年の十一・十二の兩月に藩内の東端坂元村（今ノ相生村内）より西境土器村まで海岸里數三十六里二十一町四十間九合の測量を濟せた。

此等の事實は後、文化五年三月より九月にかけ伊能忠敬が幕命により四國測量を爲せるとき貴重なる豫備資料となれる事は勿論である。久米榮左衞門手記中の文化五年八月測量一件聽書には、松山領・今治領土州に於て伊能忠敬一行に對する贈物及び宿の待遇向き、測量用の設備とすべき小屋、船、人足、馬匹の數まで細大洩さず記されてゐる。かくて榮左衞門は文化六年七月には高松藩天文測量方を仰付られ、二人扶持を給せられる事となり　彼にとつては其の實學を生かし得る途が開かれた。

榮左衞門が北海の急を說き露艦に當るべき『戰船作製圖』を發表したのは文化四年十二月、彼が二十九歳の冬であつたが、中年三十五歳の頃より腰指銃を手始として死の直前天保十一年、六十一歳の夏に至る迄盛に銃火器を製作してゐる。即ち、三十六才にして無敵鎗間銃を製したが、此の銃銘には『大阪間五郎兵衞重富之門人久米通賢謹誌』とされてある。此は豫て榮左衞門が研究せる明書武備志中に示されてゐる諸葛武侯火攻の器「鋼輪」より思ひつきて製作せるものであるが、當時歐州に於て盛んに用ひられし、ナ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ボレオン式銃よりは數等進歩せるものであると謂はれる。更に、文政七年、四十五歳にして百敵砲及用法一巻を作り、倭蘭折衷の風砲を製して藩公に献上してゐる。而して彼が最も得意の兵器を作製せるは天保十年六十歳の夏にして、劍間銃　手火巣銃・必勝銃・極密銃・中地雷・神雷砲・馬上銃・生火銃を藩主に献じたのは此時である。生火銃に就いては、久米榮左衛門研究の第一人者、岡田唯吉翁は其著「讃岐偉人　久米榮左衛門翁」に於て『吉雄常三（譽師）ガ雷管銃ヲ作ツタ天保十三、四年ヨリハ三、四年モ早ク又歐洲ニ於テ和蘭軍隊ガ未ダ雷管銃ヲ採用シナイ二年前ニ於テ我ガ日本ノ久米榮左衛門ガ既ニ自製ノ雷管銃即チ生火銃ヲ美シイ塗箱ニ入レ且其表面ニ Kunnelfur 新製生火銃ト記ン當時世界ニ誇ルベキ新發明ノ銃トシテ之ヲ高松藩主ニ献ジテ公然發表シタノデアルカラ其卓見ト造器技術ハ實ニ世界第一優秀ノモノデアツタト云フ可キデアル4）』と評して、彼が極めて創意に満ちた科學者たりし事を強調してゐる。

更に、土木家としての榮左衛門を見るに、「阿野郡北御供所浦新開ヨリ林田村末包新開迄方位記」〔文政九年丙戌正月二十三日行測入〕5）など極めて丹念なる方位の實地測量が行はれてをり坂出鹽田の築造大成功以外に、大阪淀川尻の改修を設計して、天満橋、難波橋、堂島附近の寄洲三千六十坪を浚へて下新堀（現今の六軒屋川であり、寄州と略同面積）を埋めて新開地を作るなど6）、更に伊豫別子銅山の改修（文政九年四月鈴木武兵衛より懇請せられ快諾して赴く）7）、遠州新居港の實地測量切開設計（天保七年十月、遠州新居湊の切開御用仰付）8）、宇多津鹽田築造設計（天保十年起工立案）9）、等は未完成とはいへ彼の隠れたる功績の一つに數へられよう。さて今彼が極めて優れたる科學者たる事を立證する好個の資料として坂出錬田共濟會に存する模型・文獻を探るに前掲の軍事關係以外種々なる測量方位記　測量記、天文分野の圖、曆象考成、渾天儀、天球儀、地球儀、櫓時計、晴雨器模型、水上げ器、更に産業土木關係のものとしては砂糖製法帳、砂糖車元帳、古江新田加藤地竹田ノ前濱設計圖、中川小橋鋪石之積、西新開濱中新開濱方御口銀元帳、別子立川樋設計圖、新居築港圖、大阪淀川改修工事設計圖說明入　經濟元錄等が見られる。此等は其の何れを採つて見ても、彼の研究に科學性と實踐性のにじみ出し尊き姿を見出しうるであらう。

二、坂出鹽田と久米榮左衛門

坂出市の鹽田と久米榮左衛門とは不可離の關係にたつ。併し乍ら久米榮左衛門以前に於て坂出附近に製鹽が行はれなかつたかといふに決して左様ではない。古くは延喜式（十四主計上に『讃岐國。調。兩面五疋中鹽。阿野郡輸二煮鹽一』と見

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

え、慶長・元和の頃に至つて播州赤穂方面より移住し來れる人々によつて古濱（昭和六年廢田となる）など開かれたと傳へられる。高松藩主は既に初代の頃より鹽田には注意したのであらう。高松藩記、英公（賴重）傳に『正保三年公就封之後民家歲殷、而鹽田陂池亦以漸告成』とある。更に同藩記、賴恕公事略には、

『文政十二年己丑八月阿野郡北阪出村新開地成功す』[11]

としてをり此新開が第九代藩主賴恕の叡智と久米榮左衛門の工夫設計によつて大成功を收めし事を述べて遺憾がない。元來鹽田の築造設計開發については、高松藩は積極助長の方策を採つたのであるが、賴恕が久米榮左衛門の技術を用ゐる事によつて初めて成功したのである。然も久米榮左衛門は單なる技術屋ではなかつた。產業開發についても一角の識見をもち、然も綿密なる計畫性をもつてゐた。一例を擧げると文政七年十月十三日彼の藩公賴恕への建白書『乍恐奉願上內存之損益心積之口上』によると、鹽田新開については成功十分なる見透しと、不拔の決意を有せしものゝ如く

『阿野郡北坂出浦沖新開別紙心繪圖面內存之通兩樣三ケ年之間乍恐私ノ了簡ニ被爲御任被下候得バ爲冥加一命ニ替テ御奉行出情仕度（中略）若又見込違御座候節ハ一命ヲ指出如何樣之死罪ニ被仰付候共一向迷惑申間敷タメニ起請文ヲ指上置右御用ヲ相勤申度盡ノ國家貧民之タメ一命ヲ惜マン哉何卒々々右前文之通三ケ年之間御任被成被下候得バ御上樣ニハ少モ御出銀ニハ不及、又ハ他所ヘモ樂シ不申右新開過半築立指上可申上候間偏ニ宜敷樣被仰付被下候樣奉願上候』[12]

とて、烈々の氣魄を見せ、更に砂糖及び鹽の穩定利益に就いて次の如く、

『乍恐右兩樣出來之上ハ御國益相成候分

砂糖壹朱分銀之寄　百三拾五貫目

鹽方御口銀之寄　百四拾貫目

入銀合貳百七拾五貫目但シ米ニ直シ此米四千石也

乍恐是ヲ香川郡之御高ニ直シ見レバ高八千七百五十石ニ當ル是則田畑開發同斷也尙亦御引替銀出銀札ヲ減スル事六七百貫目余モ候由候是則國出入勘定推算カ肝要ト奉存候已上

申十月十三日　久米榮左衛門[13]』

と建言してゐるのであるが、果してそれより後六年天保十三年二月に於ける東濱及び西濱の御口銀御冥加の兩者を合せると、此兩濱のみにて百拾三貫五百貳拾六匁四分九厘に達してゐる。今之を實證する有力なる資料に坂出市香川善吉氏所藏の「坂出浦新開鹽濱之圖」（天保十三壬寅炎鐘上旬改之）があるが、新開鹽田の圖面に次の如く添書されて

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ねる。

坂出浦御新開鹽濱之圖

天保十三壬寅次鐘上旬改之

東濱〆五拾九貫五拾九匁九分
西濱〆五拾四貫四百六拾七匁五分九厘
兩濱納り辻合
百拾三貫五百貳拾六匁四分九厘

別

御口銀　一、四拾九貫百六拾九匁貳分　八（推定）厘
此鹽拾六万三千八百九拾七俵六歩
但壹俵ニ付三分宛

御冥加　一、六拾四貫三百五拾七匁貳分一厘
此鹽壹万六千八拾九俵三歩貳毛五絲
但壹俵ニ付四匁宛

〔東〕14)　壹番　壹貫三拾九匁七分五厘
（中　略）
卅七番　壹貫四百參拾貳匁貳分
東濱〆五拾九貫五拾九匁九分

〔西〕15)　三番　貳貫四百參分
（中　略）
卅五番　壹貫四百五拾九匁五厘

西濱〆五拾四貫四百六拾七匁五分九厘

斯くして坂出鹽田は文政九年三月十一日榮左衞門が御普請奉行を命ぜられて以來三箇年半文政十一年八月には殆んど竣工してゐるが、其の鹽田及附屬地百十五町六段八畝、畑地百十六町九畝十歩、竈數七十五に及び使役工夫延人員百九拾三萬八千六百餘人に達したと謂はれる16)いま舊坂出町のみに於ける昭和十一年四月專賣局の調査によると、鹽田反別百貳拾參町壹段貳拾參歩、竈數七十七であり17)、榮左衞門時代と大差なきことが肯かれる。茲に於て、坂出市今日の殷賑は鹽業に關する限り久米榮左衞門に發すると言ひ得るが、畏くも大正十一年十一月二十日には皇太子殿下が坂出市に行啓、翌十二年五月十日には久邇宮殿下同妃殿下良子女王殿下、信子女王殿下が御成り遊ばされ、鹽田作業及び久米榮左衞門の遺品を台覽し給うてゐる18)。更に、昭和十年八月十六日には澄宮殿下、同十二年六月五日には朝香宮鳩彦王殿下が親しく久米榮左衞門の遺品を台覽遊ばされてゐるが、地下の榮左衞門以て瞑すべく、今日久米式鹽田が內地模範鹽田として推奨される所以も亦實に榮左衞門自身の設計工作が科學性に富む事より齎らされる當然の歸結と榮譽と謂ふべきであらう。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

三　特に經濟元錄に就いて

坂出市鎌田共濟會には久米榮左衛門の稿本「經濟元錄」が寶藏せられてゐる。かねてより筆者は此の鹽田關係の經濟書を他の一聯の記錄と共に披見したき念願をもちゐたるところ昨夏岡田唯吉翁の特別の御配慮により其の披讀を許された。豫期せる如く經濟元錄は所謂經濟原論的な理論經濟學の構想を展示せるものではない。主として鹽の問題を核心として、當時諸問屋心積之扣、阿州撫養濟田鹽濱掛物、假問屋被仰付之事、濱方庄屋之事、獵方御運上銀之事、諸國鹽賣仕切之寫、竹原濱仕切狀之事、多喜濱鹽賣仕切、御新開鹽仕切狀之事、鹽判鑑、坂出村古濱諸掛り物、御新開濱方締諸掛惣積り新濱定條々、濱百性共諸掛物定數之心積、問屋ゟ運上銀之事、鹽メリ方出役人並帆別方兼帶之事、御口銀定數之事、乍恐口上、鹽濱都合六十七軒此地場料壹ヶ年分銀六拾七貫目也、鹽竈家壹軒前入目銀仕分、鹽田方之覺、江戸鹽問屋名前、御國ヨリ江戸迄海上里數、御新開竈家汐垂穴並ニ畝數古濱積、濱地面間數、寅（天保元年カ）四月廿五日濱子一統呼酒呑セ左之通申述候、御新開壹舛寸法、廻船積入、潟元諸掛物、幾久嶋、高屋諸掛物等の諸項目を備忘錄的に配列したものである。極めて實際的であり、鹽田關係の築造、計理、積送、販賣に就いて文化・文政年代の樣相を究むるに好個の資料といへよう。

先づ其の著作年代に就いては、たゞ其の末尾に、「八月、右御奉行樣より茂左衛門へ御申付久藏召連調候」とあるのみにて此の年代は推定するの外ないのであるが、岡田唯吉翁は其の時期に就いて二つの推定をせられる。即ち、

一、文政九年三月十一日榮左衛門が藩より御普請奉行役を命ぜられる少くともゞ二年前、即ち文政七・八年頃藩公に獻言すべく鹽田築造の豫定利益等を考へ工夫・企畫裡に之を書き下したるもの。

二、鹽田の一應竣工せる文政十二年八月め少し前より書き下したるもの。之に就いては、榮左衛門は鹽を出來次第各地に積送販賣して、所謂換價しゆける跡が見られるから最も合理的な判斷ではあるまいか。

と言はれるのであるが、筆者は原文を三讀四讀且つ榮左衛門自身の他の手記類をもたどる事により本著は文政七・八年頃決して完成せるものではなく、天保の初期少くとも二・三年頃までに備忘錄的に其の經緯を羅列集蒐して表紙をつけ綴ぢ込めるものとの見透しがついた。所藏家に對して甚だ粗忽失禮と思ひながら「經濟元錄」の表紙を剝ぐと、果して「上下聞記」、更に其の下部に隱れて、「三省

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

秘錄」の表題が新たに見出された。之に據つて、榮左衞門が此の稿本の表題を名づけるに就いても可成り苦心せるあとが見出され、「三省秘錄」とすべきか、「上下聞記」とすべきか思案の揚句を意を決して「經濟元錄」と表題し、貼紙をつけたのであらう。最初から三省秘錄といふ自省錄の表紙を利用したものとは思へない。文中隨所に散見する申四月は文政七年、酉四月は文政八年、子十月は文政十一年であると思はれるが、寅四月廿五日付にて「濱子一統呼酒呑セ左之通申述候」とて、高松藩が藩庫缺乏の折柄無理算段をして坂出東西大濱の新開決行せる次第を述べ當御新開にて渡世致候御厚恩忘却不致候樣御濱隨分に大切に致家業出精致候事並ニ御奉行御恩別而忘却無之樣被致候事」と結んで、濱子に自粛を要望してゐるが、此は其の反面に於いて既に坂出東西兩濱開墾が成功し相當の收益を擧げ得るに至つた事を證する文言であり、從つて其の文頭に見える寅四月は坂出墾田成功（文政十二年八月）直後の寅天保元年（文政十三年）と斷定して殆んど誤りはない。かくて筆者は未だ大規模鹽田の開墾せられざる同じ寅年文政元年まで遡り推定する勇氣をもたない。「經濟元錄」の述作年代が文政初期に遡り得ない有力なる論據に次の事實が發見せられる。即ち、榮左衞門自身の手記「文政十年亥極月上旬ゟ東新開諸積心覺19)」であるが、之は奇蹟的に「經濟元錄」の一部分と合致する。更に文政亥年（文政十年）久米氏所藏「宿元銀渡シ之寫20)」のうちに見られる次の鹽判鑑など、「經濟元錄」中に含まれる、それは明らかに此處より轉寫採錄せるもと思はれる。

鹽判鑑

御改萬雜燒ニツ
一分俵四千四百拾貳俵

俵燒印　さ　坂出
同燒印　番附

右者引田久米屋久左衞門殿船へ鹽積渡申處紛無御座候、以上
文政十一年子九月廿日

讃州坂出鹽問屋
米屋佐次右衞門
鹽舛改方

江戸御仲買衆中

據つて、之亦文中に見える年號文政十一年九月廿日より遡り得ざる一資料となるのである。

榮左衞門は坂出墾田築造計畫を樹立する前に、聖通寺山などに登りて方位を見定める等の土木學的な立場からは勿論の事、他の諸國鹽田例へば、阿波・撫養・齊田・赤穗・

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

竹原・潟元・幾久嶋・高屋・瀬戸田　初瀬濱などに就いて築造形式、仕切、商慣習に就いて具さに周到な研究をしてゐる。一介の科學者、土木家としての久米榮左衛門は經濟人としての原價採算にも亦極めて明るき見識をもつてゐたと思はれる。例へば「經濟元錄」中に見られる「御新開出來揃五ケ年後御國へ御益入金之積」などを見るに、

一鹽濱都合六拾七軒
　此地場料壹ケ年分
　銀六拾七貫目也
　　但壹軒ニ壹貫ツヽ、下シ料中口口

一御口銀六拾貳三百目
　但壹軒前ニ付別段右口口也御定法トシテ　俵壹分五厘掛ト
　其余分御口銀ハ暮節季濱百姓へ指戻可申積
　外ニ畑方在畝百拾町餘
　右高寄四百八拾石余
一御年貢米下ミ作德米共正米千石余
　右濱方畑方御帳面通
　壹ケ年分三千兩斗リ
　右御新開ヨリ出來物入金水揚之高寄
一鹽濱分壹万〇〇五貫目也
　此金壹万五千四百余兩
　　但釜屋壹軒前ニ付壹ケ年分水揚銀高拾五貫ツヽ、之口口
　口積リ
一畑方實綿壹ケ年貳千本餘
　此金貳千兩余又外ニ雜穀之類
　千四百石余此金千兩余
　畑方金〆三千兩餘ニ當ル
　壹ケ年分入金之高
　濱方畑方合壹万八千百兩餘
　　濱又後年ニ至流水等之御普請ニ口口得共御年貢米其ノ外
　　御益多キ地面ニ御座候

久米榮左衛門の經濟元錄を中心として

子（文政十一年）五月中旬直段

とあり、莫大なる利益ある事を豫見した。鹽に就いては既に述べた如くであるが鹽田外の棉の利益などに就いても一本一兩と見てをり、砂糖・鹽に比して此種綿の資料極めて乏しきうちに好個の示唆を與へる。

註　砂糖・鹽・綿を稱して讃岐三白といふが、德川末期高松藩庫殷賑の基底をなせるもの。而して此の三者の研究に就いては、砂糖と鹽に關する限り相當の文献が讃岐各地に殘つてゐるのである。綿に關しては甚だ尠い。之は民間傳承によるの外はないが、白鳥本町の古老楠正雄氏、坂出市の濱田六藏翁の談を綜合すると現在琴平電鐵の一ノ宮・岡田を結ぶ坂出港のヒンターランドが有力なる中心地として考へられる。濱田翁の談によれば、岡田綿なども明治初期盛に坂出に運び出され、坂出市には多くの綿屋を存してゐたといふ。

經濟元錄の冒頭「當時諸問屋心積之扣」には、

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

『御新開諸問屋之義ハ當時御勘定所へ御預ヶ被成候て出來鹽拂仕切金悉問屋手元へ取納置然上ハ松葉其外正金買之分右問屋手元ヨリ入用之仕切金丈ハ相渡候樣仕度尤寛立□銀之內四歩ハ是非出金ニ相成候者ニ御座候得共右之外米麥雜穀ニ至ル迄右問屋ヨリ濟百性、仕入等いたし仕成ニ相成候得者殘金子ハ聊之義ニ而御銀札ニテ相濟候者ニ御座候』とて、新設鹽問屋と御勘定所との資金關係を示唆し、硬貨節約の舉にいで、鹽の薪たる松葉の正金買の外、勉めて銀札使用にて濟さんとし、播州赤穗などの例もひいて『役所ヨリ金入用程ヅヽ相渡候樣』なる仕成を說いてゐる。而して此時の江戸にて渡される大俵一俵外目は貳斗九升、問屋口錢九厘、上荷賃三厘、と定められてゐる。更に、次の「假問屋被仰付事」に從へば、既に其頃鹽問屋株の成生せる跡が窺はれ、然も文中松葉等之仕切銀拜受等の語句より察すれば、高松藩が砂糖爲替に就いて肥料代貸付による金融統制を爲せる如く製鹽の重要燃料たる松葉の買入に就いても亦同樣に、可成り嚴重に其の買入に對して介入統制の擧にいでんとせるものゝ如く思はれる。御新開濱方に就いては、丈吉なる者を推薦し、御新開進行中、中川立景ノ網漁臘方運上銀等、二三十兩は樽築臨時費用に充足せんとし、更に齋田・赤穗・竹原・多喜濱などの鹽竈仕切狀を極めて丹念に調査して、出荷俵數、御上納銀、口錢、積出賃、川堀などの比較研究を爲し、當東西御新開の鹽仕切狀に就いては次の如く揭げてゐる。

御新開
鹽仕切狀之事

御改貳斗六升古入

一分俵五千五百俵也
五匁宛分ケ
此大俵貳千七百五拾俵也
御銀拾四貫貳拾五匁也
外ニ
一貳百七拾五匁也　大俵ニ付壹分宛　口錢
一百拾匁也　同　四厘宛　積出賃
一四匁□□　八分　廉売ニ付此分　川堀
一拾三匁七分五厘　大俵ニ五毛ヅヽ　荷賃
一五匁也　荷直、貳人
一壹匁五分　俵ニ付壹匁五厘掛　口錢
一四百拾匁五厘　川
合拾四貫四百三拾五匁五厘
右之通鹽積渡御銀錢ニ請取此表無出入相濟申候　以上
子八月（文政十一年ト推定）　坂出問屋

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

新設西新開大濱三十三軒〔一町五反歩に釜屋一軒あり之を一鹽戸といふ〕の竈家より の物出來壇に就いては、一軒前九千俵と見積り、分俵は貳拾九万七千俵、大俵拾四萬八千五百俵とし、之に八厘を掛け拾壹貫八百八拾目を算出、竈屋壹軒前より金壹兩貳歩づつ御運上銀を出さしめる事としてゐる。

御供所山端より末包新開土手迄の間數は東西千六百九拾三間三合であり、御新開竈家汐垂穴は西御新開は都合四千三百六拾九、中御新開は五千四百六十四あり、竈家數は西、三十三軒、中、三拾七軒の多數に達してをり、其の御新開壹外の寸法は内渡四寸九歩、深さ二寸六歩五厘と決定してゐる。

末尾の方には

潟元諸掛物

一金相場出入共高松之通

一鹽壹夜出來高四拾五俵ゟ四拾壹貳俵斗

一御口銀壹夜年中拂ニ貳拾八俵納

幾久嶋

一大風雨破損之節高松表ヨリ御見分參リ御修覆被下候 但損之節ハ早々申出ル

一壹夜出來鹽四拾俵位

一御口銀ハ出來鹽貳拾俵ヨリ貳拾五俵迄

但出來鹽高六歩掛御口銀ハ三分ツヽ、

久米榮左衛門の經濟元錄を中心として

高屋諸掛物

一壹夜出來鹽凡三拾俵ヨリ貳拾五俵位迄

一御口鹽拾五俵ヨリ貳拾俵

として他所濱に於ける壹夜生産高・御口銀の比較研究を示してゐる。

「經濟元錄」其他榮左衛門手記類に據ると人足賃錢は文政末凡そ壹人七十文より壹匁四分位である。方位の實測を記入せる「阿野郡北御供所浦新開ヨリ林田村末包新開迄方位記」などの隨所に散見する所に據れば、其の支拂日は一・六・三・八の日となつてをり、大坂・京都方面より計貳万三千貳百人を傭ひ入れ、壹人賃錢七拾五文を計上して代銀寄拾七貫四百目を支拂ひし事が記されてゐる。更に、文政九年「諸積之心覺21)」末尾に見える諸算用控之率に從へば、他所人足への支拂賃錢として正銀拾匁のうち銀三匁、其餘銀札渡とし、札・銀七・三の割合としてゐるのは興味ある比率と思はれる。文政末期に於ける高松藩の銀札インフレーションと其の對策に就いては、又別の機會に詳論し度き念願に滿ちてゐる。〔完〕

註

(1) 「興業意見」卷二、一二〇頁(「明治前期財政經濟史料集成」第十八卷)

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

（2）社會經濟史學第十二卷第十一・二號（特輯大會報告號研究報告欄）

（3）岡内棣撰「坂出墓田碑銘」（碑文坂出市鎌田圖書館ニ在リ）

（4）鎌田共濟會編岡田唯吉翁著「（明治）維新人久米榮左衛門翁」三七頁

（5）坂出市鎌田共濟會博物館所藏、久米榮左衛門手記

（6）久米榮左衛門大坂淀川改修工事圖及同手記

（7）久米榮左衛門別子銅山改修關係手記及往復文書

（8）遠州新居港切開キ關係往復文書、新居港中山屋和十郎製圖、

（9）久米榮左衛門手記錄

（10）宇多津産砂新開内積帳及同鹽田圖

（11）高松藩記十二頁

（12）同藩記八二頁

（13）鎌田共濟會寶藏「久米榮左衛門建白書」

（14）（15）此の東西兩濱の新開鹽田の御冥加御口銀に就いては東は壹番より卅七番まで、西は三番より卅五番まで明確に圖上に現はれてゐるが、此處には東西各の兩端の納りと其の合計のみを示すことゝした。（圖面所藏家、坂出市香川善吉氏）

（16）前揭岡田唯吉翁著「久米榮左衛門翁」二五頁

（17）昭和十一年四月二十八日鹽業時報第二十六號附錄

（18）岡田唯吉翁「久米榮左衛門翁」四二・四三頁

（19）鎌田博物館寶藏文書、久米榮左衛門手記類東二冊之内壹番、新見出朱記イノ八

（20）同館文書、「（文政）宿元銀渡シ之寫」（久米氏）五冊之内三番

（21）同館文書、榮左衛門手記「（文政九年）諸積之心覺」總紙數三十五枚の最後に見られる。

本號執筆者紹介

小川福太郎氏　本校教授
兒玉洋一氏　本校助教授
寺田貞次氏　本校名譽教授
松浦正一氏　本校贊助會囑託
木原幸祐氏　本校事務囑託